

琉球大学学術リポジトリ

高機能自閉症をもつ小学生男児の6年間の変容過程：
トータル支援と学校における重要な他者との関係性
の変容

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2016-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本間, 七瀬, 武田, 喜乃恵, 浦崎, 武, Honma, Nanase, Takeda, Kinoe, Urasaki, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34467

高機能自閉症をもつ小学生男児の6年間の変容過程

～トータル支援と学校における重要な他者との関係性の変容～

本間 七瀬¹⁾ 武田 喜乃恵²⁾ 浦崎 武²⁾

The Process of Change for the child with High Functioning Autism for six years

:A relationship with snuggle in a special support class
with Cyclic guidance

Nanase HONMA¹⁾ Kinoe TAKEDA²⁾ Takeshi URASAKI²⁾

要 約

琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センターの統括の下、トータル支援に携わって6年になる。その後、地域の支援者で企画と運営を行うことになり地域主導のトータル支援教室が始まった。今回はトータル支援教室に参加している高機能自閉症のある男児の変容過程を学校生活の様子と照らし合わせながら振り返ることを通して、子どもと関係性を紡いでいく支援のあり方や支援姿勢について検討した。

1 はじめに

八重山地域では、2011年より琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター（以下、センター）の統括の下、地域の支援者たちで『八重山トータル支援教室（以下、トータル）』を開催してきた。参加しているのは、学校で‘気になる’と言われるような子どもたちである。参加する子どもを固定化し、担当制をとり支援者でふり返りを重ねながら、子どもたち及び支援者の変容を追ってきた。トータルでは、遊びを通して、‘誰かと何かをして楽しむことの積み重ね（快情動の共有経験）’を大切にしながら関係性を深め、子どもたちの社会性の基盤作りに力を入れてきた。自然発生的な展開を大事にし、子どもたちが生き生きと主体的に活動や人へと向かう姿を追いかけている。このトータルの構造や変遷については、武田・浦崎がまとめている（武田・浦

崎 2014）。

筆者は、センター主導の時から支援者として活動に参加し、2011年に地域主導になってからは企画作り・活動の進行・子どもへの支援に携わってきた。小学校教員をしながら、勤務時間外にトータルの活動を継続してきた。筆者も含め、トータルの支援者は主に地域の小・中学校教諭で構成されている。学校現場では、どうやって子どもたちを目標に向かわせるか、どうやって到達ラインに導くかが重視されがちであるが、トータルの実践では子どもと支援者が‘共に楽しむ’という対等な関係でいることが求められる（浦崎ら 2014）。重要な他者との関係性を深めていくことを発達支援の軸にしているトータルの実践において、どのように子どもたちと関係構築していくのか、どのようなやりとりで価値を見だしていくのかを考え続けることは、支援者側の学びにもなっている。

1) Arakawa Ele.School,Ishigaki City,Okinawa Pref

2) Faculty of Education,Uni.of the Ryukyus

筆者は、トータルでの実践で学んだ関わりの視点をもちながら学校現場でも子どもたちと関わり、共有世界を広げる支援の重要性や、快情動の共有体験を積み重ねることの重要性について検討を重ねてきた（本間・浦崎2013, 本間・浦崎2014）。これまでの実践から、子どもの‘今ここのありのままの姿を受けとめること’や、‘一緒に何かをして共に楽しむ体験’を積み重ねることによって、結果として子どもが成長した姿に出会えるという実感を得ることができた。かたちや目標ありきではなく、子どもの変容から結果として見えてくる大切なことを確認しながら支援のあり方を考えてきた。

今回もトータルに参加している子どもについて、トータルでの様子・学校での様子・保護者の心情を照らし合わせながら変容過程を整理し、支援者の支援姿勢について検討する。トータルでのエピソードは、主に地域主導になってからの様子を取り上げ、学校での様子は、小学1年生から6年生までを取り上げる。そして、どのような関わりが子どもの変容につながったのかを考察し子どもと関係性を紡いでいく支援のあり方や支援姿勢について検討する。

2 方法

(1) 事例の概要

①対象児について

対象児A君は、高機能自閉症をもつ男児で、5歳からセンター主催のトータルに参加。(7歳の時、地域主導のトータルになった。)2歳11ヶ月で自閉症の診断を受け3歳から療育を開始。幼稚園の頃登園しづりがあった。保護者は特別支援学校への就学を希望したが就学支援委員会で通常学級の判定が出る。保護者と教育委員会の話合いのもと特別支援学級(知的)へ入級。入学当初は水道の水や換気扇をずっと眺めているような状況だった。6年間のA君との関わりの中で、A君の内面世界に、重要な他者とのつながりが生まれ、A君の心が‘物から人へ開かれていった’様子を感じることができた。

②家族構成

父・母・A君・弟の4人家族。

③出生から就学までの様子

妊娠時・出生時特に異常なし。39週と2日で生まれる。体重2760g。首座り2ヶ月

・寝返り3ヶ月・お座り6ヶ月・はいはい9ヶ月・一人歩き1歳5ヶ月。3・4ヶ月のまなざしの共有あり。人見知りなし。初語2歳半。1語文3歳。6ヶ月頃誰にでも抱かれた。1歳2ヶ月誰が話しかけてもニコニコしていた。小児科医の勧めで病院を受診し2歳11ヶ月で「自閉症」と診断される。療育手帳も所持していたが就学前に外れる。3歳～8歳まで療育を受け言語訓練などを行っていた。5歳で幼稚園に入園。後半、担任が変わったことをきっかけに登園しづりが始まる。自傷行為もあり家で笑わなくなった。チック症状も出る。

④就学後の様子

入学当初は自分の世界に入っている感じで水道にいることが多かった。蛇口から出る水の行方に興味があるようで排水溝をたどったりしていた。はじめは席に座っていても課題が終わると席を離れ水道に行くことが多かった。計算や書字で間違えたり勝負に負けたりすると鉛筆を噛んで折ってしまったり、テスト用紙を破ってしまったり机を倒したりした。話をするときには自分の言いたいことだけを伝え相手の話は聞いていないように見えた。給食ではデザートと牛乳以外は受け付けなかった。排泄では換気扇が怖くてトイレに入れない、大便の際におしりを拭くことが難しい実態があった。トイレトペーパーの巻き方を身につけるまで時間がかかった。勝敗が絡む時に突発的に乱暴な行動をしてしまうことがあったが、自分で‘乱暴がいけない’ことは分かっているようで、すぐに我に立ち戻り立ち尽くす姿があった。内股で走ることや飛ぶことなどが苦手で折り紙は上手だった。

⑤検査結果

＜6歳5ヶ月・就学支援のWISCⅢの結果＞
全検査IQ93 言語性80 動作性108 (言語理解79 知覚統合116 注意記憶91 処理速度80)。全体的知的発達水準は平均。全体的知的発達水準は平均。

＜11歳1ヶ月・児童相談所実施のWISCⅣの結果＞

全検査IQ106(言語理解101 知覚推理136 ワーキングメモリー94 処理速度81)。全体的知的発達水準は平均。

⑥環境・対象児と関わる人々について

＜A君1年生時＞

校区内の大規模校(500名規模)に入学。

知的特別支援学級（以下、支援学級）に在籍。1年生1名（A君）・3年生3名の4名の学級。弱視の児童に特別支援教育支援員（以下、支援員）が1日4時間ついていた。もうひとつの支援学級には、4年生3名、5年生3名の計6名在籍。協力学級であった1年1組の人数は32名。1年生の始めは協力学級で過ごし、その後は体育やお楽しみ会等で交流学习を行った。担任はトータルの支援者でもあった（以下、担任a）。父母共に障がい受容できており支援機関とつながることでA君を支えてきた。入学から1ヶ月は母親が付き添って4校時まで教室で見守っていた。（一つ下の弟が幼稚園から帰宅するまで。）登下校は母親が車で送迎し、帰宅後は主に家庭で過ごすことが多かった。学校外の友達はトータル参加児童4名である。

< A君2年生時 >

学級は1年生と同じ構成で担任は変わらず担任aであった。

< A君3年生時 >

2学級だった支援学級が1学級になり、3年生1名（A君）、5年生3名、6年生3名の7人の学級。担任は変わらず担任aであった。3年生のスタートは協力学級で学習することを希望。7月初旬、「協力学級でも学習をしたい。」との申し出があり、その後は、算数・理科・音楽・体育・学活を協力学級で学習した。

< A君4年生時 >

2年生1名、3年生1名、4年生2名（A君と転入生男児）、6年生2名の計6名学級。担任は変わらず担任aであった。これまでは母親による車の送迎で登校していたが車が故障したことをきっかけに母親と歩いて登下校するようになった。母親の迎えを待ちきれずに、一人で下校する姿も見られた。

< A君5年生時 >

担任が代わった。5月の宿泊学習まで協力学級で学習。大きな人的・環境的な変化で不登校になる。学校に行けない間、市のデイサービスを利用。学校でも何度か話合いがもたれ、保護者と学校、関係機関が連携することで登校支援を行う。A君の‘行きたい’という気持ちを尊重して、興味のある行事に参加できた。後半は、委員会の仕事のときに行くなど登校時間が増える。

< A君6年生時 >

再び支援学級が2クラスになる。2年生1

名、3年生2名、4年生1名。もう一方は5年生3名、6年生2名（A君）の学級。担任が代わった。1学期は1週間に1日程度休むことはあるが登校をしづる様子は見られなくなった。欠席はなく体調が悪くても遅れて登校。支援学級では国語と社会のみを学習し、それ以外は協力学級で過ごす。

（2） 実施期間・支援の実施場所・筆者の役割・立場・関わり方

①センター主導のトータル

市内の教育事務所の一室で、1年に2回（45分間）のトータルの支援者として関わる。A君幼稚園生の12月～A君6年生の10月計5年10ヶ月で現在も継続。

②地域主導のトータル

市内の教育事務所の一室で、2ヶ月に1回（45分間）のトータルの企画・支援を担当。筆者は主に進行役を努めることが多かった。A君2年生の11月～A君6年生の12月計4年1ヶ月で現在も継続。A君の担当はA君の当時の担任でもあった担任aである。

（3） 八重山トータル支援教室について

トータルは2009年よりセンターによって企画・運営されていた（『トータル支援（Total Support Group）』浦崎）。筆者はその頃から支援者として活動に参加。2011年11月から八重山教育事務所のサポートを受けながら地域主導の集団支援に移行。構造を下記に示す。①企画・運営者・・・市内の小中学校教員4名（筆者と担任aを筆頭に特別支援学校教諭、特別支援学級教諭）②支援者・・・上記4名に加え活動の時に支援に携わる学校教員や福祉施設の職員、地域の方、高校生ボランティアが5名ほど。③回数・・・2～3ヶ月に1度④ねらい・・・それぞれの楽しみ方が認められ安心できる場所で他者との関わりを育てる。他者と楽しみを共有することを通して社会性の基礎を培う。企画のテーマや企画で扱う素材の感触、その素材を使った遊びを楽しむ。⑤参加児童（現在の年齢）小学6年男児・支援学級在籍・高機能自閉症（A君）、小学4年男児・通常学級在籍・高機能自閉症（以下、B君）、小学6年男児・支援学級在籍（以下、C君）、小学3年男児・特別支援学校在籍（以下、D君）、小学校3年女児・支援学級在籍（以下、Eさん）

<これまでの企画>

第1回 2011.11 ふわふわワールド

- ～風船であそぼう～
- 第2回 2012.2 によろびょんワールド
～なわ・ひもであそぼう～
- 第3回 2012.5 だんだんワールド
～段ボールであそぼう～
- 第4回 2012.8 ひらひらワールド
～布であそぼう～
- 第5回 2012.10 دوستこいワールド
～すもうであそぼう～
- 第6回 2012.12 クリスマスワールド
～ゲームであそぼう～
- 第7回 2013.5 空港ワールド
～紙飛行機であそぼう～
- 第8回 2013.10 ハロフィンワールド
～かぼちゃであそぼう～
- 第9回 2013.12 クリスマスワールド
～みんなであそぼう～
- 第10回 2014.5 こねこねワールド
～粘土で遊ぼう～
- 第11回 2014.9 海のお祭りワールド
～海人になってみよう～
- 第12回 2014.10 ハロウィンワールド
～仮装して町へいこう！～
- 第13回 2014.12 クリスマスワールド
～みんなであそぼう～
- 第14回 2015.8 おにごっこワールド
～みんなであそぼう～
- 第15回 2015.12 クリスマスワールド
～みんなでサンタさんの指令をとこう～

(4) 分析資料と分析方法

分析資料として、①トータルの実践記録、②トータルのビデオ映像、③担任 a の記録、④保護者の記録を活用する。①～④をもとに A 君の変容を感じた出来事をトータル・学校生活・保護者の視点から整理し表 1 に示す。その中で特に A 君の変容にとって重要であったと思われるエピソードや関連のあるエピソードを抽出し学年ごとに分けて記述する。小学校 1・2 学年をⅠ期、3・4 年をⅡ期、5・6 年をⅢ期として考察する。総合考察では、どのような支援姿勢が A 君の変容につながったと思われるかについて考察する。

3 経過と小考察

「 」は A 君や母親の発言。〈 〉は支援者の発言。《 》は他児の発言。以下、エピソードに多く登場する人物について示す。B 君(トータル参加児童。A 君より 2 歳下。高機能自

閉症。) C 君(トータル参加児童。A 君と同じ年。特別支援学級在籍。) H 君(A 君の 2 歳上の級友。)担任 a(トータルでの A 君の担当支援者及び A 君 1 年～4 年の担任)担任 b(A 君 5 年の担任)担任 c(A 君 6 年生の担任) N(筆者、トータルでは B 君の担当、進行役を努めることが多かった。)

1 第Ⅰ期の経過：人との関わりの中で不安が安心へ変わった時期(A 君 1・2 年生)

(1) 1 年生の A 君の経過

①トータルの様子

【センター主催のトータル『みんなの町を作ろう』9 月 6 日(センター支援者の記録)】

前回(A 君が幼稚園生の 12 月)は、初めて来る場所であったことや遅れて参加したこともあり、クーラーやエレベーター、トイレなどのボタンを押すことの方に興味がいってしまい少ししか活動に参加することができなかった。今日は、待合室では椅子に座って絵本に興味をもっている。スムーズに活動部屋へ移動し見本と同じように車を作成。できあがると「ぼくの車かっこいいでしょ。」と何度も言う。このまま車に執着して終わってしまうのかと思ったが「信号機も作ってみる？」と提案するとすぐに材料を取りに行った。弟と一緒に参加しており、お互いの作る物を見て自分の作品の発想を広げている姿が見られた。

②学校での様子

エピソード 1 トイレの換気扇の音に敏感な A 君と A 君の不安に寄り添う担任 a

A 君は換気扇の音が気になって教室のトイレに入ることができない。換気扇に紙を貼りカーテンを取り付け換気扇そのものも見えないようにし、ようやく入れるようになった。しかし 12 月頃からそれでも入れなくなってしまった。ドアの前に立ち「音が聞こえる」と言う。「大丈夫！ほら換気扇のスイッチも入ってないよ。」と私が言うと「ほんとだ」と言うものの「でも聞こえる」となかなか安心してくれない。「じゃあスイッチが入ってしまわないようガムテープで固定する？」とさらに提案。「それはいいですね。」と言ってくれスイッチをガムテープで固定した。しかし、いざ中に入ると「やっぱり聞こえる」と言って出てきてしまう。その後は耳栓を持つての登校が始まった。「先生、ここにいてね。」と A 君が言い、用を足す前にトイレの前に立

ち音を確認。耳栓をして見守り役を立て追い立てられるかのように素早く用を済ませた。

③保護者から見たA君の様子

入学前に事前にAも含め先生方（支援学級担任・協力学級担任・教頭先生）と顔合わせし入学式の場所や席の確認をする。入学式はとくに問題なく参加できた。新しい環境で不安があったので最初の1ヶ月は教室に付き添った。担任や支援員に慣れ始めると母親が付き添わなくても大丈夫になりその頃には学校のルールを覚え始めてくる。聴覚・臭覚・味覚などが敏感なため唯一入ることの出来るトイレの換気口を目隠ししたり、給食は自宅からご飯だけを持っていったりするなど、その時にあった支援を支援学級の先生と話合って対応。そのため安心して学校に通うことができた。

（2）2年生のA君の経過

①トータルでの様子

【第2回 によろぴょんワールド～なわ・ひもで遊ぼう～2月17日】

みんなの後ろから眺めつつどの遊びをしようか考えている。B君の《けんけんぱ！する》の声に誘われるかのように移動し床に置かれた綱でできた輪を2回繰り返しジャンプ。その後、B君にぐるぐると縄をまきつけられると電車のようなになった。嬉しそうだが笑いながら縄から出てしまう。しかし「一緒に電車ごっこしよう！」と声をかけると笑顔でのってきた。一番端の支援者を運転手に電車ごっこが始まった。そこへ電車からぬけだしたB君がみんなを巻き込み始める。自分の電車の縄と混ざり合い戸惑っているのかと思ったら「そうだ！〇〇しよう。」と縄を見ながら思い浮かんだ遊びをみんなに提案。その流れの中で「つなひき」と言い出した。真ん中に毛糸で印をつけ地面にも印の中間線を引くなど自分のイメージをどんどん形にしていく。勝負はA君対B君、A君対C君、A君対B君とC君とどんどん盛り上がり全員が参加。トーナメント表を自分で作ってつなひき勝負を続けようとするが時間が超過して活動は終わりになってしまった。

②学校での様子

エピソード2 ‘ちょうど’が好きなA君とそのタイミングを共に楽しむ担任（4月）

歯磨きタイムの音楽終了とともに流れるチャイムの‘ちょうど’のタイミングが心地よ

いA君。しかし当番によって時間が余ったり足りなかったりすると「今日の放送当番はだめだ！」と怒り出してしまった。＜放送をよく聞いているね。こんなに真剣に放送を聞いてくれる人がいたら当番も嬉しいだろうな。＞と肯定的に伝えるが納得できない表情で無言。すると「放送室に行ってくる！」と3階へとかけだしてしまった。放送委員を前に「すみません。音楽をちょうどに終わらせてください。」とA君。あっけにとられた放送委員だったがA君の話を黙って聞いてくれた。私が事情を説明すると放送委員は《ちょうどに終われるよう頑張る。》と答えてくれた。次の日から‘ちょうどに終わる放送’が増えてきて‘今日はどうだろう’とちょうどでないのはイライラするけど楽しみのようでもあった。歯磨きタイムが終わりに近づくと「し～先生聞いて」と声をかけてくれた。音楽の終了にあわせて耳を澄ませるA君と一緒に耳を傾けちょうどに終わると「やったね！」とハイタッチ。終われない日は「あ～終われなかった。」の言葉で済むようになった。

エピソード3 限られたものしか食べないA君とやりとりを楽しむ担任（5月頃）

偏食が強く牛乳以外のメニューを食べることができない。スパゲッティの日、スプーンで麺をつつきため息をついている。私が「このスパゲッティおいしいね！」と言い支援員も「ほんとおいしい。」と笑顔で食べながら「1本だけ食べてみない？」と促してみた。迷っている表情だったが1cmほどの麺を食べてくれた。＜すごい。おいしい？＞「うん・・・大丈夫・・・」と言いつつこれ以上食べることもなかった。火曜日は麺と決まっていたので、スパゲッティ・やきそば・うどんとA君の挑戦が始まった。＜今日は5本に挑戦しよう。＞「え～5本」と言いながら麺を取り出す。「1本・2本・3本・これで4本・・・」＜あっ！今のは短いから0.5本じゃない？＞「え～。じゃあこれは？」＜う～ん。0.8本かな？＞「これならいいよね。」＜お～長いね。それならいいぞ。＞というやりとりを楽しみながら5本の麺をとり全部食べてくれた。その後10本20本と麺の数が増え、最終的にはお皿いっぱい麺を食べることができるようになった。

エピソード4 負けて怒るA君とA君の怒りを受けとめるH君

お昼休み、将棋好きのA君と初心者のH君が将棋を始めた。圧倒的にA君が強いが時折駒をとられてしまうことがあった。《いえーい！角とったぞ！お返し！》とH君が駒を取ったとたん、A君はH君の頭を叩いてしまった。《やるか！》とH君もやりかえし将棋盤と駒ははじけ飛び将棋どころではなくなってしまった。A君が落ち着いた頃にそばに行き、飛車をとられて悔しかったんだね。でもH君さん痛かったと思うな。楽しく将棋ができるといいね。>と声をかけたが悔しそう。このようなやりとりが続いたある日、角をとったH君が頭を叩かれながら《大丈夫！大丈夫！》とA君に言葉をかけ、やり返さなくなった。H君は覚え立ての将棋が楽しかったので、A君が将棋をやめてしまうのを避けたかったのだと思った。‘最終的にはA君が勝つんだから大丈夫’と言っているようだった。それでもA君の叩く行為が続いたのでH君に<痛いからやめてって伝えた方がいいと思うけど>とアドバイスしたが、H君はA君に伝えることはなかった。その後H君が勝って喜ぶそばでA君はH君をたたく代わりに駒をかじり怒りをこらえるようになった。

③保護者からみたA君の様子

思い通りに行かずイライラしているとき友達からちょっかいを出された感情を抑えきれなくなると椅子を持ち上げることもあったが先生が声をかけることで感情を押さえることもできた。喧嘩をしても考える時間や先生の言葉かけで素直に反省し謝ることができたし相手を許すことも出来た。

小考察：第I期（A君1・2年生）

入学したばかりのA君は水道や換気扇と対峙することが多かった。A君の興味が水道の水や空調・機械の部品であったことや換気扇の音が気になって活動に気持ちが向かない様子が担任aには‘物へのこだわり’に見えた。始めの頃のA君の様子を担任aは‘こちらの話を聞いていないように見える’と表現しておりA君とのやりとりが一方的なものに感じられている。新しい環境であることや感覚過敏があることからA君の不安は大きかったと思われる。エピソード1とエピソード3からは、そのようなA君の‘不安’が少しずつ‘安心’に変わっていく様子が窺えた。A君が「そ

こにいてね。」と担任aに見守り役をお願いしたり、苦手なスパゲッティを担任aとのやりとりの中で少しずつ食べたりする姿から、不安な気持ちをA君と担任aが共有している様子が窺え、A君の視野の中に不安を共有してくれる他者として担任aの存在が膨らんでいったことが感じられた。

トータルでも、始めの頃は換気扇の音を気にしてなかなか活動に気持ちが向かない時期があった（センタートータル・A君幼稚園生）。第2回（2年生）では、B君に刺激されてジャンプをしたり、B君やC君に声をかけながら綱引きを楽しんだり、物を相手に遊ぶのではなく物を誰かと共有しながら遊ぶ姿が見られるようになり、遊びの場でも物から人へと気持ちが向かい始める様子が見られた。このように見てくると、不安が安心に変わる過程と、物から人へと気持ちが向かう過程が重なっているように感じられた。

2 第II期の経過：重要な他者との関係性を基盤として集団の中で楽しみや喜びを見いだす時期（A君3・4年生）

(1) 3年生のA君の経過

①トータルでの様子

【第4回ひらひらワールド～布で遊ぼう～8月24日】

始めは支援者と布被せ鬼ごっこをして遊ぶが、支援者が出す様々なアイデアを「嫌だ。」と断る。C君が支援者と布で綱引きをしている様子を見て「C君と勝負をしたい。」と言ったがC君が別の遊びに変えたため勝負ができなかった。支援者が<一緒に綱引き勝負をしよう>と誘うと「子ども同士の勝負がいい。」と断る。その後、支援者皆で大きな布を広げ遊び始めるとA君もそれに加わった。支援者が布を上下させるとその下に入って横になり楽しそう。布を持ちひらひらさせながら支援者と協力して遊んだり、布の中にみんなで寝転んだりしながら遊んだ。終盤「みんなで綱引きです。」とA君の仕切りで綱引きが始まる。A君と支援者1人対残りのみんな（4名程）で行った綱引きはA君側の負け。負けた時には肩を落とし悔しがっていたが<一人でよく頑張ったよ。>と支援者に声かけられ気持ちをもち直した。「誰か助けてくれる人を呼べばよかった。」と発言した姿が印象的だった。

【第6回クリスマスワールド～ゲームで遊ぼう～ 12月15日】

A君チームとB君チームに分かれて、そりりレーや綱引きをサンタと一緒に楽しむ企画。サンタとの綱引きの後、A君の提案でA君とB君の1対1の綱引き勝負に発展。2回戦もA君が勝ち「やったぁ」とガッツポーズ。終わりの会で進行役の担任aが「今日はひきわけです。」と発表したとき、A君が「いいえ、ちがいます。ぼくの勝ちです。」と自分が勝ったと主張。担任aは「それはB君が勝って綱引きはA君が勝ったから、引き分けです。」と説明するがA君は納得できずに「最後の本格的勝負でぼくが勝ちました。だからぼくの勝ちです。」と顔を真っ赤にしながらか訴える。この時、B君が自分が負けたと自覚している表情だったため、担任aがB君に確認した後、「Aさんチームの勝ち！」と発表。「やった～！」と喜びを表すA君に担任aがストップ。まだ続きがあるよ。」と言った。B君も2回勝ったよね。B君にも拍手。」とB君の頑張りを讃える。話題がB君チームのことになり、しばらくB君の方を見つめるA君の姿があった。

＜事後ミーティングでの話＞

支援者からは「B君が納得できるように得点を掲示すればよかった。」と「負けると嫌がると知っていながら、勝負させるような企画設定をしたのがよくなかったのではないか。」と反省が出た。センタースタッフが「A君が必死に自分の気持ちを伝えたあのやりとりが良かったと思う。」と話し、山上雅子氏が「A君が、B君との綱引きを『あの本気勝負』と表現していた。そのこともすごいし、あんなに綱引きに熱中する子どもたちの姿が珍しい。A君はこれから変わっていくかもしれない。」と話した。支援者たちは「体験そのものが尊いこと」に気付かされた。

②学校での様子（担任aによる記録）

エピソード5 苦手なことに挑戦するA君と応援する担任（宿泊学習・10月）

地区で毎年行われている支援学級の宿泊学習。A君は1・2年生時は宿泊せず、日中の活動のみ参加していた。宿泊学習が近づいた頃、「ぼく、今年はおとまり頑張ってみようかな」と言い出した。私はA君の頑張ってみようという気持ちが嬉しくてA君のチャレンジを何とか成功させたいという思いを強めた。

宿泊当日、滞りなく活動が進みいよいよ就寝時間が近づいてくると心細くなってきた様子。床につくが泣きそうになっていた。「大丈夫、一緒にいるよ。」と私は不安そうなA君に声をかけた。目を閉じて眠りに入ろうとしては、こちらを確かめるといいうしぐさを何度か繰り返し眠りについた。眠りに入ってから何度かこちらを見ることはあったが、朝まで何事もなく過ごすことができた。

エピソード6 ‘人の役に立ちたい’という気持ちの芽生え

迷路作りで遊んでいたとき、私はカードを置きたいのだが誰かがその前のカードを置いてくれないと自分のカードを置くことができない。順番はA君の次が私。タイミング良くA君が私のカードにつながる前のカードを置いてくれたので思わず「ありがとう。うれしい！」と言うと「そうですか。ぼくも役に立て嬉しいです。」と答えてくれた。その後、進んで授業前のコンピュータの接続を手伝ったり、遊びに使った物をきれいに片付けたりと生活のいろいろな場面で自分にできることをしようとする姿が見られた。お礼を言うと「ぼく、人の役に立ちたいんです。」と嬉しそうに話していた。同じように家庭でも買い物の荷物を持ったり電気を消したりするなど手伝う姿が見られるようになったそうである。

③保護者から見たA君の様子

色々なことに意欲的になり挑戦したいという気持ちが芽生えてくる。このとき初めて支援学級の宿泊学習で宿泊まで頑張ることができた。頑張れた理由は『先生（担任a）がいてくれるから。』と言っていた。家では少しでもお手伝いをして母親である私の役に立ちたいという気持ちからか買い物の荷物持ちや就寝前の電気のチェックなどをしてもらえるようになり、「お母さん、助かった？」と聞いてくるので「すごく助かったよ、ありがとう。」と声をかけるととても嬉しそうにしていた。自分が必要とされたり役に立てたという思いがあったりすると自信がつき頑張れることが増えるのだと思った。

（2）4年生のA君の経過

①トータルでの様子

【第7回空港ワールド～紙飛行機で遊ぼう～ 5月17日】

飛行機が苦手なA君。本物の飛行場があると思っていたようでドアが開いて本物ではない

と知った瞬間「良かった。」と安堵。活動中、始めは何をしていいかわからず紙を持ったまま立ち尽くしていたが支援者の声かけで紙飛行機と一緒に作り始めた。その後、作った紙飛行機を何度も飛ばし、投げ方や飛ばせ方を工夫して楽しむ様子があった。苦手なことがテーマでも、自分なりの楽しみ方を見出しているA君を感じた。

【第9回クリスマスワールド～みんなであそぼう～4年生12月14日】

小麦粉粘土で作った雪だるまに「雪をふらせま～す。」と言い上から柔らかい紙粘土を振りかけていた。感触が気になるのか使うのは指先だけ。雪遊びでは、苦手な紙片だが昨年より積極的に関わっていた。「1番楽しかったのは作品を作ったことです。お楽しみもあって楽しかったです。またやりたいです。」と感想を発表した。手が汚れることを嫌がるA君だが、作品作りを「楽しかった」と発表する姿に嬉しくなった。

②学校での様子

エピソード7 場を乱す友達に怒りを表出するA君（5月）

遊びの時間の時、〈今日は色おにするよ。みんな集まって。〉と全体に呼びかけると《おれ、やらんし！》と朝から機嫌が悪いH君。するとA君が「だめだよ、みんなで作らないと。」と言った。‘やらん’と言ったH君も初めてだったが、みんなで作ろうと感情を露にするA君も初めてのこと。《おれの勝手だろう。おまえが決めるな！》「やらないとだめだよ。」《やらんし～》「キ～（声にならない声で怒り、机を押し倒す。）」「みんなで作らないとだめなんだよ。（泣きながら訴える）」《やらんくてもいいし。（強い口調）》周りのみんなはびっくりして声も出ない。暴力行為をした後にいつも後悔の気持ちをもつA君。今回は思いが伝わらない悔しさもありいつもより興奮している。しばらくして私がく一緒にやれるのは嬉しいことだけど、やりたくないって思う日はやりたくないと言え、やらなくてもいいんだよ。〉と伝えてみた。「だってだって」と納得のいかない様子。そのとき別の友達が《Aさん早く色おにしようよ。時間がなくなっちゃうよ。》と声をかけてくれた。周りのみんなも声をかける。納得のいかない表情ではあったがなんとか気持ちを切り替えて遊ぶことができた。次の日もH君の

反発は続き同じようなやりとりをした。3日目も同じように遊びを拒否したH君。3日目は、A君が「遊びたくないと思うときは、遊ばなくてもいいんだよね。」と話し、言い合いになることはなかった。その後、途中からH君も加わることになり、いつもの遊びの形になった。

エピソード8 同じ質問を繰り返す自分について担任aの気持ちを尋ねるA君（4月）

清掃時間、『トイレの神様』の音楽が流れると決まって同じ質問をしてくる。「どうしてトイレをきれいにしたんですか？」〈それはね、大好きなおばあちゃんに‘申し訳ないことをしたな’と言う思いがあって、トイレを掃除して大好きなおばあちゃんを思い出してるのかな。〉と私なりに返答。「そうですか。」とやや納得していないような返事だった。翌日も『トイレの神様』が流れると「どうしてトイレをきれいにしたんですか？」と尋ねてきた。私は〈トイレはね、みんなの汚いものを受けてくれるでしょう。だからきれいにした方ががいい、みんな気持ちよく使えるよね。〉と返答した。「そうですか」と昨日と同じように、ふにおちていないA君。昨日とは違う内容で答えてしまったことや答えに困る難しい質問にとまどっていた。どう言ったら納得してくれるのかと迷いながらのやりとりがその後も毎日続いた。このやりとりが4年目に入った頃、いつものように「どうしてトイレをきれいにしたんですか？」とA君。〈トイレはね、みんなの汚いものを受けてくれるでしょう。だからきれいにした方がいいよね。そうしたらみんな気持ちよく使えるよね。〉「そうですか」といつもの返事をした後、「先生はどうしていつも僕が同じ質問をしているのに答えてくれるんですか？」と突然の質問。私は「えっ！それは・・・質問されたら答えた方がいいよね。」と答えながらもA君が‘こちら側’の気持ちを考えてくれたような気がした。「そうですか。」とA君は言い、その後A君の真意を確かめることもなく、このやりとりは、清掃時間の曲の変更とともに終わりを迎えた。

③保護者からみたA君の様子

成長を感じる出来事があった。小学生の将棋大会でいつもだと負けると怒って駒を噛んだりぐちゃぐちゃにしまったりするのだが、この頃は負けても怒ることなく、楽しん

で何人もの小学生と将棋を打つことができた。最後の感想発表では自分から積極的に手を挙げて「将棋で勝ったり負けたりすることがとても楽しかったです。」と堂々と発表する姿を見てとても驚いた。

小考察：第Ⅱ期（A君3・4年生）

第Ⅱ期はA君が子ども集団の中で気持ちや言葉のやりとりを積み重ねた時期であった。トータルでは、子ども同士の勝負に意欲的な姿が見られ（第4回）、「誰かを呼べば良かった。」というように、誰かと一緒に何かを楽しもうとする気持ちを感じられた。学校でも、集団の場を乱す友達に対して「みんなで遊ばないとダメなんだよ。」と怒りの感情をぶつける姿があり（エピソード7）、A君がみんなで遊ぶことの大切さを感じていることが伝わってきた。また、A君の言動に様々な変化が現れ、「挑戦する気持ち」（協力学級での学びを希望したことやエピソード5）や「人の役に立つ喜びを感じている姿」（エピソード6）を担任aも保護者もA君の「成長」と捉え、大きな喜びを感じることができた。

このような気持ちが生まれたのは、支援学級が「安全基地」になったからだと考えた。3ヶ月間、協力学級で過ごしてみて自ら支援学級でも勉強したいという気持ちを担任aに伝えた。大集団の場に行くことを全部あきらめてしまうのではなく、両方の場が自分にとって必要だとA君自身が感じており、「何かあったときには戻れる場所」の役割を支援学級が果たしていたと思われる。A君の不安と一緒に寄り添ってくれた担任aとの関係性を土台として新たな世界へ一歩足を踏み出そうとする気持ちが芽生えたことが窺えた。「先生（担任a）がいるから宿泊できる」（保護者の記録3年生）や、自分に対する担任aの気持ちを知りたがる質問（エピソード8）からA君にとって担任aは「自分の心を支えてくれる大切な存在」になっていったことが窺える。別府（1997）が著書の中で「心の支えとなる人」について述べている。不安・不快な場面で大人を求め、その人を支えに立ち向かえる関係が成立したときがその時だとし、自閉症の子どもたちがこだわりを乗り越えたり、新しい世界に出会ったりすることができる」と述べている。怖い換気扇のあるトイレに入るとき、「先生そこにいてね。」と言ったA君や、苦手なスパゲッティを食べてみようかなと思え

たA君や、「先生がいるから頑張れる」と宿泊学習に挑戦するA君の姿から、担任aは、A君にとって「心の支えとなる人」であったと筆者は考えている。

このような重要な他者との関係形成の中で、A君の対人関係の変容を強く感じる事ができたのもこのⅡ期である。エピソード8は質問の内容がトイレのことから担任aの気持ちに変化しておりA君の自他意識の芽生えを感じた。母親のお手伝いを率先して行い「お母さん、助かった？」と聞き、母親が喜ぶ姿にA君も喜ぶというような親子の心の結びつきの中で「役に立つ喜び」を感じているA君の様子からも、大切な人とのやりとりを積み重ねていくことで自分の気持ちや相手の気持ちの理解が進んでいくのだと思われた。

3 第Ⅲ期の経過：つながる感覚を支えに共有世界を結ぼうとする時期（5・6年生）

（1）5年生の経過

①トータルでの様子

【第10回こねこねワールド～粘土で遊ぼう～5月16日】

空き瓶に紙粘土をくっつけてお城を作る企画。テプラのカセットに興味津々で他の材料を選ぼうとしない。席に着いてからもカセットに夢中。＜終わってから本体の仕組みを観察しない？＞と声をかけると活動に入ることができた。紙粘土を瓶につける作業をしている時、B君がA君に向かって話しかけた。B「Aさん、どうして双子なの？」A「〇〇（弟の名前）は弟で僕はお兄ちゃん。」担任a「今日弟はどうしたの？」A「三線の帰りでお母さんが迎えに行ってるんです。」N「先生も三線習ってるよ。」A「そうなんですか？！知らなかったな。」A君がNに向かって「今日うれしいなあ。先生のおかげだよ。」N「なにに？」A「先生が終わりの言葉を僕に決めてくれたおかげだよ。」A君に声をかけられて嬉しいNはさらに話しかける。N「Aさんの作品教会みたい。いいなあ。Aさんのお城で結婚式あげさせてね。」A「いいけど！」粘土遊びを楽しみながら友達や支援者との心地の良い会話が続いた。終わりの会が始まると「もうしくみは見なくていいです。」とA君が言ったので、カセットより作品をみんなで見合う方に気持ちが向いたのだと思った。

②学校での様子

4年間を共に過ごした担任が代わり協力学級の担任も代わり環境的な変化が大きかった。A君は不登校になってしまった。以下は母親のすすめでA君が新しい担任（担任b）に書いた手紙である。5年生は協力学級でスタートさせたので担任bとA君は、ほとんど交流がない状態であった。

A君の手紙（転記）6月3日

①先生に、もう少しぼくの話や気持ちを聞いてから分かってほしい。②給食で食べれない物がある時は「がんばって食べて」といわないでほしい。③支援学級だけでやる行事をやってほしい。例「クリスマス会・お楽しみ会など」④五年三組でつかれてしまった時は、支援学級でゆっくりできる時を作ってほしい。（好きなことができる時間）⑤じゃがいも作りをして食べたい。先生の表情がもう少しやさしくして、楽しそうな感じだと話しやすい。⑥話を聞いてくれた後に、やさしい口調で話しかけてほしい。⑦ぼくが伝えた事を先生がやってくれない。

【離任式3月24日 A君の様子】

花道のアーチを持ちたがるが、できないと知り上履きを投げたので担任bが上履きを預かる。しばらくして「返して下さい。」とA君。＜アーチは係が決まっています。持つことはできません。やりたいことが全てできるということは学校ではできません。＞と担任b。その後A君自从来室し「さっきはごめんなさい。」と自分から謝る。＜自分で気づいて謝ることができてえらかったね。＞と担任bが言葉をかけた。

③保護者から見たA君の様子

6月まではどうにか頑張っていたが心身ともに限界が来てしまい不登校になる。この頃は毎日、心が壊れてしまいそうなくらい声をあげて泣いていた。自分のことを理解してもらえないことで居場所がないようだった。そのうち自分自身を責め始める場面もあり否定的な性格になっていく。‘何をやってもだめな自分’という気持ちになり将来を悲観するような言葉まで出始める。このときAに初めて発達障害の話をしてみた。それでも頑張っている人が世の中にいること、普通の人にはない良いところもたくさん持っていることなど、生き方は一つではないということも含めていろいろな話をした。Aを応援してくれる

味方がいることも話した。その中にはトータルの先生たちがいることも話すと「そうだね。」と思い出したようにうなずき、時間はとてもかかったが少しずつ元気を取り戻していった。

(2) 6年生のA君の経過

①集団支援での様子

【センター主催のトータル 10月】

トータルの合間には、1年に2回センターのスタッフが中心で行う‘海ワールド’の企画がある。そのときは固定メンバーに加え、市内の保育園や幼稚園からも子どもたちが集まってくるため、6年生のA君にとって少し幼い内容になってしまう。それを心配して母親が〈どうする？〉と参加の意思を確認したとき「ぼくが楽しいって思って参加できればいいんじゃない？」とA君が言った。母親は、A君の言葉にはっとさせられた。

【第15回クリスマスワールド 12月8日】

みんなでプレゼントの箱を開け中に入っているサンタクロースからの指令を解いていく企画。綱引きのときには、一番年上の6年生という自覚のもと、グループを割り振ったり、力関係を調整して自分の立ち位置を考えたりすることができた。椅子取りゲームのときは、どうしても勝ちたくて尻餅を2回もつきながら必死で椅子に座ろうとした。結果負けてしまうが笑顔で応援役にまわった。黒ひげ危機一髪ゲームでは、はじめは「椅子取りゲームと同じようにしましょう。（飛び出た人は抜けていく。）」と提案したが、途中で「飛び出た人が勝ちにしよう。」とルールを変更。5回戦を楽しむことができた。はじめとおわりのあいさつを自分に当ててほしいA君だが、この回で初めて一度もその役が回ってこない状況になった。それでも「あれ、どうしてかな。」「今日はなんだか変だな・・・」と言いながら、やりたい気持ちを調整している姿があった。

②学校での様子

協力学級の児童の「もっとAさんのことを知りたい」という言葉をきっかけに、協力学級・支援学級の連携のもと、保護者の協力を得て‘Aさん理解’の授業が実施された。また修学旅行前ということで「リーダーになりたい」と言ったA君に、協力学級の担任が〈それなら友達の名前をちゃんと覚えなくちゃね。〉と励まし、A君は自分が気になる友達か

ら順番に「友達になってください。」と声をかけている。不登校の状況は改善している。

③保護者から見たA君の様子

支援学級と通常学級の先生との連携もよくとれ、クラスの友達の理解もあるので頑張ってみようと過ごすことが出来るが友達の顔と名前がなかなか覚えられないことに悩むときもある。自分なりにどうしたらいいのか考えているのかもしれない。学級で修学旅行のグループリーダーを決めるのに、3人の友達とグループが作れた人からリーダー決めができると言われ、どうしてもリーダーになりたいAは、少し考えてから気になる人に近づいて声をかけ、その人の名前を確認してから「○○さん、僕と友達になって下さい。」と言ったとのこと。その話を聞いたとき、Aが自分なりに一生懸命考えて勇気を出して行動した姿にとっても嬉しく成長を感じることができた。

小考察：第Ⅲ期（A君5・6年）

担任が変わったことがA君にとって大きな出来事だったというのは言うまでもないが、それでもA君が担任bに手紙を書いたり（5年生6月）、自分から謝りに行ったり（5年生修了式）する様子からは、A君が自分の気持ちを相手に伝えて、分かってもらおうとしている気持ちが見える。A君の手紙には、どんな場所だったら安心できるのか、どんな学習活動を望んでいるのかが明確に示されており、4年生までの過程においてA君が自分の気持ちを受けとめてもらい、みんなといることが楽しいという気持ちを育むことができたからこそ生まれた気持ちだったのではないかと考える。A君の内面に‘自分の気持ちを分かってもらった’という‘つながる感覚’が確かなものとして育まれたことで、新しい担任に自分の気持ちを伝えようと思えたり、委員会活動や行事のときに登校できたりするというようなA君なりの思いや願いをもつことができたのだと思われた。その思いを受けとめて、支援者側がどのようにA君とのやりとりを重ねていくのかということが支援姿勢を考えていく上で重要であると思われた。そのような視点で見えていくと、6年生になって登校しづりが改善に向かった背景の一つには、A君の思いや願いが担任に伝わるようになったということが挙げられる。「修学旅行のリーダーになりたい。」というA君の願いを受けて、協力学級担任がくそれなら友達の名前を

覚えなくちゃね。>と励まし、A君は、自分から友達に声をかけはじめる。A君側の気持ちを聞いてから次のやりとりを作っていくという担任と協力学級担任の関わりに支えられて、A君は在籍学級での共有体験を広げることができたのだと思われた。

また、A君は不登校で苦しい時期、トータルにはいつものように参加していた。トータルの支援者を‘自分を応援している存在’として認識してくれている話（5年生母親の記録）や、内容が自分の思い描くものでなくても‘自分が楽しければいい’と、内容ではなくトータルという場に来てくれようとした気持ち（センタートータル10月）から、トータルがA君の心の居場所になっていると感じられた。活動の内容ではなく、‘大切な誰かと何かができる楽しみ’をお互いがもてる関係に近づけたことが支援者にとって大きな喜びになった。

表1 A君の変容を感じた主な出来事とそのときのA君の様子（下線は事例の中で取り上げたもの）

時期	学年	学校での様子	トータルでの様子	保護者の心情
Ⅰ 人との関わりで不安が安心へ変わった時期	1	<ul style="list-style-type: none"> ●物を相手にする時間が多い。 ●換気扇の音を怖がる。「先生、そこにいてね。」と言って耳栓と担任の付き添いでトイレに入る。(エピソード1) ●負けると怒って机を倒してしまうが回を重ねていく中で怒っても机を倒すことはなくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●紙飛行機で遊ぼう(センタートータル) クーラーやエレベーター、トイレのポタンへの興味。 ●みんなの町をつくろう(センタートータル) 車作りに執着しながらも、支援者の提案によって、別の材料をとりに行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●担任や支援員に慣れると付き添いがいらなくなった。 ●そのときに合った支援を担任と話し合っただけで対応することができて安心だった。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ●給食時の音楽がチャイムと同時に流れず怒る。(エピソード2) ●苦手な食べ物を少しずつ食べるようになる。(エピソード3) ●将棋で負けて悔しくてH君の頭を叩いてしまう。(エピソード4) ●終了式の日、「ぼくかっこいい3年生になる。」と言って協力学級での学びを希望する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●第1回ふわふわワールド 11月 大きな風船のかたまりでバレーを楽しむ。みんなの輪の中に入り、風船を落とさないように何度もレシーブをしていた。 ●第2回よるびょんワールド B君の影響を受けて遊びに参加したり、自分から他児に声をかけたりして遊ぶ。縄を使って綱引きを提案する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●イライラしても先生の言葉かけで感情を押さえることができた。 ●友達と喧嘩しても、反省したり、謝ったり許すことができた。
Ⅱ 重要な他者との関係性を基盤に集団の中で楽しみや喜びを見いだす時期	3	<ul style="list-style-type: none"> ●始業式、自分から協力学級に向かう。3ヶ月間全ての時間を協力学級で過ごす。 ●7月、支援学級でも勉強がしたいと担任に伝える。A君と担任で相談しA君の好きな算数・理科・体育・音楽を協力学級で学習しそれ以外を支援学級で学習することになる。 ●10月、支援学級合同宿泊学習で宿泊したいと自分から言い出す。(エピソード5) ●「役に立てて嬉しいんです。」と言うようになる。(エピソード6) 	<ul style="list-style-type: none"> ●第3回だんだんワールド 5月 初めは座って周囲の様子をうかがっていたが支援者と一緒に乗り物遊びやロボットになったりして楽しみ始める。B君に段ボールを壊されても「あはは」と苦笑い受け流す。「こわされて、ちょっと悔しかったけど、でも、最後までできたのが楽しかった！」と感想発表。 ●第4回ひらひらワールド 8月 A君の仕切りでみんなで綱引き。負けたとき「誰か助けてくれる人を呼ばよかったです。」と発言。 ●第5回どすこいワールド 10月 熱があり休ませようとした母親に「行きたい。」と言って来てくれた。行司に合わせて「はっけよいのこった」と声をかけたり友達に拍手を送ったり勝利のポーズを決めたり、相撲という活動を楽しんでいる様子。「紙相撲と指相撲が楽しかったです。」と発表。 ●第6回クリスマスワールド 12月 A君とB君の綱引きの本気勝負。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学校であったことをよく話してくれた。 ●理科の授業をとっても楽しみにしていた。授業で発表することが大好きで、挙手しても当ててもらえないと怒ってしまうことがあったが、先生の言葉かけで我慢できるようになった。 ●色々なことに意欲的になり挑戦したい気持ちが芽生えてきた。 ●家でよくお手伝いをしてくれるようになった。
	4	<ul style="list-style-type: none"> ●場を乱す友達に対して「みんなで遊ばないとだめ！」と怒りを表出する。(エピソード7) ●同じ質問を繰り返す自分について、「どうして先生は僕の質問にいつも答えてくれるんですか？」と担任の気持ちを尋ねる。(エピソード8) 	<ul style="list-style-type: none"> ●第7回空港ワールド 5月 不安ながらも入室し、活動を楽しむ。 ●第8回ハロウィンワールド 10月 綱引きは後ろの方で行い、勝って「やったー」と大声で叫ぶ。「この中でもっともコインをとりました。おかしも食べれて嬉しかったです。今日はありがとうございました。」と感想を発表。 ●第9回クリスマスワールド 12月 手が汚れるのが苦手ながらも作品作りを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●できる限り頑張りたいという前向きな気持ちを感じる。疲れても話を聞き声をかけると自分なりに考えて乗り切ることもできた。 ●地域の将棋大会で勝負の過程を楽しむ姿に驚く。

Ⅲ つながる感覚を支えに共有世界を結ぼうとする時期	5	<ul style="list-style-type: none"> ●担任が代わったことなど、大きな環境の変化で不登校になる。(6月～) ●<u>新しい支援学級の担任に手紙を書く。(6月)</u> ●自分の好きな活動の時に少しずつ登校する。(委員会活動や行事など)(3学期) ●<u>終了式の日、自分の要求が通らずに上履きを投げてしまう。そのことを自分から担任に謝りに行く。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ●<u>第10回こねこねワールド5月</u> 自然と生まれた子ども同士・支援者との会話 ●<u>第11回海のお祭りワールド9月</u> ハーリー船に「スーパー船」と命名し、はりきって活動に参加。「変装をして嬉しかったです。みんなで船にも乗って楽しかったです。」と感想発表。 ●<u>第12回ハロウィンワールド10月</u> 海賊の衣装に身を包み、段ボールハウスにいる見知らぬ人と会話する。 ●<u>第13回クリスマスワールド12月</u> 子どもたちでびっくり箱を開けて箱の中から出てきた遊びを行う企画。子どもたちの会話がなかなかつながらず支援者が間に入って話をつなぐ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●<u>不登校になってしまう。居場所がない様子。初めて発達障害の話をし、頑張っている人や応援してくれている人がいることを話す。</u> ●不登校の間は放課後デイサービスに通いサポートしてもらおう。 ●学校に行けるようになりたいという気持ちを常にもっていた。
	6	<ul style="list-style-type: none"> ●再び担任が代わる。 ●登校時間が増えていき、ほとんど休まなくなる。苦手な教科(板書をたくさん写すことやまとめる授業など)があるときは憂鬱になったり頭痛が出て起きられなくなったりするときもあるが遅刻して登校。 ●<u>協力学級の子どもたちが「Aさんのことを知りたい。」と言う。</u> ●<u>修学旅行でリーダーになるため友達の名前を覚えようと頑張る。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ●<u>第14回おにごっこワールド8月</u> 母親も一緒に参加して色鬼や陣取りゲームを楽しむ。ハンカチ落としではA君が母親とT1にハンカチを落としておいかけて楽しむ。「楽しかったな～今日は。」とつぶやきながら帰って行く姿が印象的。 ●<u>第15回クリスマスワールド12月</u> 場をしきりながら楽しそうに活動に参加。負けても笑顔いっぱい遊びを続けた。大好きな挨拶が自分に回ってこなくても、「今日はなんだか変だな・・・」と気持ちをおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●校舎改築に伴い、再びトイレに入れなくなるが携帯トイレで対応。トイレの心配がなくなり、Aも安心した様子。 ●<u>支援学級と通常学級の連携の中でAなりに色んな事を頑張ろうとしている。</u>

4 総合考察

総合考察では、経過に基づき、A君の変容にとって重要であったと思われる支援者の支援姿勢について検討する。経過と小考察で、物と触れ合う時間が多かったA君が、少しずつ人や集団へと開かれていく様子について述べた。総合考察では、不安、苦手さ、こだわりを抱えながら、A君がどのような関わりを経て人へと開かれていったのかについて検討する。

1 不安に対して ～人とのやりとりの中で安心にかえていく支援姿勢～

A君の不安は換気扇や偏食に大きく表れていたと思うが、担任aは、A君が換気扇に不安を感じているときは、どうすればその不安が軽減されるのかをA君と「一緒に」考えようとした。担任aが「スイッチをガムテープで止めてみる?」と言ったとき「それ、いいですね。」と賛成の反応をしながらも結局は耳栓をしなければ入れなかったわけだが、そ

のようなA君の「葛藤」と一緒に向き合ったことが重要で、担任aが「不安」な気持ちを受けとめていることがA君にも伝わったのだと考える。「先生、そこにいてね。」というA君の言葉には、自分の不安な気持ちを担任aに預ける心情が表れており、それは同時にA君と担任aが不安な気持ちを共有している状況であり、不安を物ではなく、人で満たそうとするA君の内面の変化を感じた。はじめ「一方的なもの」に感じられていたA君と担任aのやりとりも、A君の「不安」と一緒に向き合うやりとりの中で相互作用が生まれ、担任aとA君の共有世界が広がると同時にA君の不安が和らいでいったのではないかと考えられた。

また、保護者の記録からは入学式の事前準備や、換気扇や偏食への対応などA君や母親の「不安」に理解を示し、話し合いながら進めたことが「安心」につながったことが読み取れ、保護者やA君が安心できる環境を構築することが、関わりの初期段階で重要な支援姿

勢であったと思われた。

2 苦手さに対して ～‘楽しさ’で包み込む支援姿勢～

A君の苦手なものとして給食が挙げられる。入学当初、給食ではごはんと牛乳しか口にできなかったA君が、担任aとのやりとりの中でお皿いっぱいのお皿を食べることができるようになった。偏食との向き合い方として、担任aは、まず大人が楽しく食べることを大事にした。その上で1cmの1本の麺からスタートし、A君が得意な数をやりとりの種にして「0.5本、0.8本」などとユーモアのあるやりとりをしながらA君の‘食べてみようかな’という気持ちを引き出していった。そのような場の雰囲気と‘ちょうど’が好きなA君に合わせての楽しいやりとりに価値があり、A君にとって給食時間は、担任や友達と一緒に楽しく食事をする時間になったのではないかと考える。苦手なものがあるときにこそ、そのような楽しい雰囲気と一緒に時間を過ごすということが重要であったと思われる。この‘不安や苦手さを楽しさでコーティングする’という支援姿勢はトータルの実践の場で学んだことである。換気扇が気になっていたA君が、換気扇のスイッチを少し触るだけで活動に戻れたり、手が汚れることが苦手ながらも粘土遊びを楽しんだりするという場面がトータルではよく見られた。このように不安や苦手さを包み込むような和やかで楽しい雰囲気を作ることが一つの重要な支援姿勢であったと思われた。

3 結果へのこだわりに対して ～体験の積み重ねを大事にする支援姿勢～

A君は負けると机を倒したり相手の頭を叩いてしまったりするほど勝敗場面でどうしようもない憤りの感情が表出していた（エピソード4）。そんなA君が4年生の時に地域の将棋大会で「勝ったり負けたりすることが楽しかったです。」と勝負の結果よりも過程を楽しむ姿を見せてくれた。ここで、A君の勝負場面の様子について振り返る。

トータルでは、第2回から友達との綱引き遊びが始まり、第3回ではA君自らシーツを綱に見立てて綱引きをしようとする場面があった。このときは色々な子どもと代わる代わるに対戦していた。第4回でトーナメント表を使って初めて企画自体に勝負の要素を取り入れた。熱があって表情があまり冴えなかつ

たが勝負に負けても大きく気持ちを乱すことなく相撲というテーマを楽しんでいる様子が見られた。第5回では自らB君との1対1の綱引き勝負に挑み、引き分けの判定に納得できず進行役に反論する。この時にA君が自ら自分とB君の対戦を「本格的勝負」と表現した。‘綱引き’というのは、自分がどれだけ力を出しているのかが自分の体にダイレクトに伝わってきて、勝ち負けを感じやすい魅力がある（山上・事後ミーティング）。ジャンケンに負ける、テストで100点をとれないという類の負けではなく、このような体を動かし心を熱くした本気勝負ができたことが、A君の心を揺さぶったと感じられた。この第5回は、支援者にとっても分岐点となった企画で、‘この私が負けてこの心が悔しい’と思える体験を積み重ねることが大事（山上・事後ミーティング）であることに気づかされた。このことは、学校で毎日遊びの時間を設定していた担任aの内面に大きく影響を与えた。担任aは、トータルでの実践をする中で、遊びや体験の積み重ねが結果として子どもの成長につながるという確信を持ったことで、自信をもって遊びの時間を継続することができた。学校では、遊びの時間を保障していく中で、憤りを人ではなく物にぶつけることで調整しようとする姿が見えた（エピソード4）。エピソード7では、みんなと遊ぶことの大切さを感じている様子と、担任aや友達のことをA君が受けとめ、「遊びたくないときは遊ばなくていいんだよね。」という気持ちへの変容が見え、そのことによってH君との対立関係が和らぎ、友達と遊びの場を共有することができた。何度も繰り返される勝負体験の中で、勝って嬉しいとき、負けて悔しいときに、その気持ちを封じ込めず出すことができたことで支援者や友達からのその時々言葉を、知識ではなく実感として自分の心に吸収することができたのではないかと考える。

この‘体験’を保障する関わりというのは、言い換えれば、‘発達とはあくまで結果であって、目標ではない。（浜田2006）’という発達観に支えられたものである。A君が、結果ではなく過程を楽しむことができるようになったのは、そうなるように目標を設定していたわけではなく、自然発生的な流れを大切にしたり、A君の今のありのままの姿を受けとめたり、子ども同士のやりとりを見守ったり

しながら、'共に時間を過ごす'という体験の積み重ねを大切にしたことによって結果として生まれたものであると考える。

5 おわりに

冒頭で述べたように、学校現場では目標や計画ありきの中で子どもたちと接することが多い。そのような中で、トータルの実践の中で学んだ、'共に楽しむ'という対等な関係でいる関わりを積み重ねていくことによって、今回の実践からも'結果として見えてくる大切なもの'を確認できた。A君の変容の中で筆者が特に心を動かされたのは、「どうして先生は同じ質問をしても答えてくれるんですか？」(エピソード8)と担任aの自分に対する気持ちを気にする様子を見せたA君の姿である。ずっと同じ質問を繰り返す自分を客観視するという自他意識の芽生えを感じた。もし担任aが'同じ質問を繰り返されたら、聞かれた方は困るんだよ'などの知識をA君に伝える対応をとっていたら、A君の'心からの気づき'は生まれなかったのではないだろうか。また、自分への気持ちを気にするほどに、担任aがA君にとって大切な存在になっていることも同時に窺え、'ここ今'のありのままの気持ちや姿を受けとめ続けること、共に楽しむ世界を広げていくことを通して、お互いを大切だと思える関係を築いていくことの意味を教えてもらった気がする。

A君の変容からの学びとして、安心感や楽しむことを育んでいくと、そこから次の関わりが生まれやすい。次の関わりが始まるとやりとりが温まっていき、お互いが大切な存在になる。お互いが大切な存在になると、何をやっても'楽しい'気持ちを共有できるようになる。気持ちを共有できる場所にいつしか'居場所'が生まれ、居場所があると新しい世界へ向かう気持ちも育まれる。このような実感が今自分の中に膨らんでいる。加えて、実感を伴う豊かな体験を通して子どもの心や言葉が変わっていくこともまた強く感じる事ができた。そのような'体験'は学校生活や家庭生活の中の一瞬一瞬に存在していて、関わり手がその瞬間をどう捉えて子どもと向き合っていくかということによって関係性や発達が紡がれていくのだと思う。'ここ、今'を子どもと共に楽しめる支援者でいたいと思う。

6 参考文献

- 浦崎武・武田喜乃恵(2014) 発達障害児の集団支援における「向かう力」の生成「トータル支援」の実践を振り返って 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 6号 51 - 66
- 武田喜乃恵(2014) トータル支援教室に参加した発達の気になる男児の7年間の変容過程琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 6号 67 - 74
- 浜田寿美男(2006) 発達支援の本来はどこにあるのか 教育と医学 5月号
- 別府哲(1997) 障害児の内面世界をさぐる 全国障害者問題研究会出版部
- 本間七瀬・浦崎武(2013) 高機能自閉症のある低学年男児に対する内面世界に寄り添う適応支援～通級指導教室と集団支援教室における関わりを通して～琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 5号 41 - 57
- 本間七瀬・武田喜乃恵・浦崎武(2014) 高機能自閉症児に対する情動の共有経験を積む支援～通級指導教室とトータル支援を通して～琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 6号 103 - 117
- 山上雅子(1997) 物語を生きる子どもたち 自閉症児の心理療法 創元社